



# ネコ王国の アップルパイ



にし はる

## バースデーパーティー

---

ここは、ネコたちが住む、ネコ王国。

今日は、ネコ王国のお姫様、マウ姫のバースデーパーティーです。

マウ姫のお父さん、ガク王様は、かわいいかわいいひとりむすめのために、ネコ王国の国民全員をまねいて、お城でせいだいなパーティーを開きました。

ガク王様のマウ姫への愛情ときたら、それはそれは、心打たれるものでした。マウ姫のお母様である女王様は、マウ姫が3つのときに病気でなくなってしまい、それからは、ガク王様が、マウ姫を大切に大切に育ててきたのです。

マウ姫が病気とあれば、王国中から医者を集めたのはもちろん、王様自身も寝ずにかんびょうしました。マウ姫が元気に遊んでいれば、けらいにそのようすをこまかくほうこくさせて、マウ姫が何にきょうみがあるかをいつも知っていました。

そんなふうに、王様が温かく見守り続けて、すくすく育ったマウ姫は、年ごとにかわいらしく、そして、美しく成長し、国民からも大変な人気でした。

この日、お城は、そのマウ姫のバースデーパーティーのためのかざりつけで、とてもはなやかです。ねこじゃらしでできたシャンデリアには、この日集めた朝つゆがたくさんあみこまれ、キラキラとかがやいています。かべは、マウ姫の好きなピンク色のお花でぎっしりとかざられ、床はピカピカにみがきあげられて、かがみのように何でもうつります。

テーブルの上にはごちそうがたくさん。最高級のかつおぶしや、しんせんなお魚のサラダ、ネズミ風味のスープ、ネコ王国特せいキャットフード、そして、マウ姫が大好きなリンゴのデザートまであります。

みんな、一言でもお祝いを言おうと、マウ姫が出てくるのを今か今かと待っています。

ファンファーレが、パパーーン・パパーーンとひびきました。

みんないっせいに、赤いじゅうたんの中央かいだんを見つめました。

すると、ガク王様とうでを組んで、マウ姫があらわれました。やわらかいシルバー色のマウ姫は、ふわふわのピンクのドレスに身をつつみ、頭には、ピンクの宝石がたくさんちりばめられ

たティアラをつけています。みんな、その美しさに息をのみました。マウ姫は、大きくすんだブラウンのひとみをかがやかせながら、王様といっしょに、ゆっくりとかいだんをおりてきました。

みんな、いっせいに、マウ姫のまわりに集まり、次々に「おめでとうございます」と、心からのお祝いを言いました。マウ姫は、ひとりひとりに「ありがとう」と、心からお礼を言いました。

さあ、パーティーのはじまりです。ネコ王国音楽団がかなでる楽しい音楽に合わせて、ダンスをしたり、ごちそうを食べたり、おしゃべりしたり、みんな、とっても楽しそうです。

マウ姫も、ガク王様とダンスをしたり、リンゴのデザートを食べたりして、とてもうれしそうです。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、夜中の0時が近づいてきました。ガク王様は、みんなにお礼のあいさつをするため、広間の中央へ、マウ姫といっしょにやってきました。

「えー、コホン。みなのもの、今日は、マウ姫のために集まってくれて、本当にありがとう。」

と、その時です。ゴオオオーツという、ものすごい風の音が聞こえたかと思うと、お城の窓という窓、とびらというとびらが、すべて、バタンッバタンッとあばれだしました。次のしゅんかん、お城の中はまっくらになり、しーんと、静まりかえりました。

みんな、頭をかかえ、目をつむり、毛をさかだてて、ガタガタふるえていました。すると、とつぜん、お城の明かりが、パッと元にもどりました。

みんながほっとしたしゅんかん、

「ああっ、マウ姫！！」

ガク王様のさけび声が聞こえました。みんないっせいに広間の中央を見ると、マウ姫がぐったりと横たわっているではありませんか。ガク王様がいくら呼んでも、死んでしまったように動きません。

その時です。どこからか、地ひびきのように、おそろしい声が聞こえてきました。

「あっはっはっは。私は、大昔からネコ王国に住んでいる、黒魔女だよ。楽しいパーティーだったようだね。楽しみのあとは、苦しむがよい。私は、みなが苦しむ姿を見るのが大好きなのさ。

美しいマウ姫は、もう永遠に動かないよ。さあ、みな、苦しむがよい。あっはっはっは。」

なんということでしょう。王国のみんなに、あんなに愛されていたマウ姫が、もう二度と、そのひとみにかがやきをもどすことがなくなってしまったのです。

「だ、だれか、私のかわいいマウ姫を、どうか、どうか、生き返らせてやってくれ！」

ガク王様は、マウ姫を抱きかかえ、なみだを流しながら、さげびました。あまりのできごとに、みんな、ぼうぜんと、ふたりを見つめることしかできません。

その時、

「王様、あたいたちが、必ず、マウ姫を生き返らせてみせます！」

ふたりのネコが、王様の前に進み出ました。

「あたいは、ニコラといいます。」

「ぼくは、スパイスです。」

王様は、このふたりのとつぜんの登場におどろきましたが、ふたりにすすがるように言いました。

「おお、そうか、そうか！ありがとう、ありがとう！マウ姫を生き返らせるための、何か、方法があるのかね？」

すると、スパイスが言いました。

「ぼくは、黒魔女の魔法をとく方法を、聞いたことがあるのです。」

すると、ニコラも言いました。

「スパイスは、この王国で一番の物知りです。王様、どうかご安心ください。」

王様は言いました。

「そうか、そうか。本当に心強い。それで、どのような方法なのじゃ？」

スパイスは言いました。

「黒魔女の魔法にかかった者の、いちばん好きなものをあたえるのです。

しかし、ただの好きなものではいけません。好きなものの中でも、この世で最高のものを手に入れなければならないのです。」

「そうか・・・。」

王様は、しばらく、マウ姫をじっと見つめながら考えました。そして、元気がない声で言いました。

「マウ姫は、リンゴが大好きでな。特に、アップルパイが大好きなのじゃ。おさないころから、どんな宝石よりも、ドレスよりも、アップルパイをおみやげにすると、あのかわいいえがおを見せてくれてな。しかし、そんなもので、マウ姫は助かるのであろうか。」

スパイスは言いました。

「それです！この世で最高のリンゴを見つけて、マウ姫にアップルパイをささげましょう。」

ニコラが言いました。

「でも、あたいたちふたりでは、とても見つけられないよ。王国のすみからすみまでリンゴをさがして、どれが最高か、見きわめなくてはいけないんだから。」

広間は、王様と、ふたりのネコのやりとりを聞きながら、シンと静まりかえっています。

その時、

「じゃあ、オレも！」「わたしも！」と、次々に手が上がり、さらに5人のネコが王様の前に進み出たのです。

「オレは、サバイバーのジェイドといいます。きけんな体力勝負なら、だれにも負けないぜ。」

「あたしは、ねぼうのハルといいます。ねむいけど、王様とマウ姫さまのためにぜひがんばります。あふっ。」

「オラは、おちょうしもののパルコですッ。リンゴさがし、オラものったッ！」

「わたしは、マイペースのミーです。変わったものを見つけるの、とくいですわ。」

「ぼくは、りくつ屋のサトと言います。むずかしいかもしれないけど、王様とマウ姫様のためにがんばります。ぶつぶつ」

王様は、7人のネコたちを見て、目になみだを浮かべて言いました。

「おお、よくぞ、名乗り出てくれた。ネコ神よ、この7人の勇者たちに幸運を。みな、本当にくろうをかけるが、わたしのマウ姫のために、がんばってきてほしい！」

「はい！」

7人の若者は、「にゃう、にゃう、おー！」と、かちどきをあげて、さっそくそれぞれ、リンゴさがしの旅に出かけました。

そんな7人のようすを、お城の柱のかけから、こっそり見ている者がいました。

ちゃっかりもので、みんなにきらわれている、ピア7人兄弟です。7人は、でぶんと太った黒い体を柱にかくして、にやにやと、なにやら考えているようでした。

ニコラはグレーの体に黒のしまもよう。おいしいものが大好きで、ネコ王国中のおいしいものをなんでも知っています。おいしいものがあると聞けば、なんでも食べてしまいます。そのせいか、ちょっとぽっちゃり。

「あたいが見つけるリンゴが、いちばんおいしいに決まってるよ。今までのけいけんから考えて、最高においしい食べ物は、なんていったって、市場にあるに決まってるよ。マウ姫様に、この世でいちばんおいしいリンゴをさしあげなくちゃ。」

ニコラは、さっそく、ぽっちゃりした体をゆらしながら、市場へ出かけました。

「いらっしやい、いらっしやいー！」

「朝とれたばかりの魚だよー！」

「今いちばん流行のキャットフードを仕入れたよー！」

ネコ王国の市場は、お店の人たちのいせいのいい声がひびき、今日も買い物客たちでごったがえしています。しんせん魚や、ネズミの肉、流行のキャットフード、もちろん、野菜やくだものも、しんせんでおいしいものがたくさん。

にぎやかな声を聞きながら、ニコラは、ぽっちゃりした体でなんとか人ごみをすりぬけて、まっすぐに1けんのくだもの屋さんに向かいました。ニコラが行きつけの、なじみのお店です。

「よお、ニコラ。今日も食ってるかい。」

「やあ、おじさん。今日も食ってるさー。」

お店のおじさんと、いつものあいさつをかわして、ニコラはさっそく聞いてみました。

「おじさん、ここの市場で、いちばんおいしい最高のリンゴ、あるかな。」

「もちろん、いちばんおいしい最高のくだものは、おれの店にしかないさ。」

「マウ姫様を助けたいんだよ。そのリンゴ、あたいにわけてくれないかな。」

「おう！そうくると思ったぜ。もちろん、いいさ。ただな、今ここにはないんだ。きちょうなものだから、家の倉庫にかくしてあるんだよ。ニコラ、ちょっと取りに帰るから、店番していてくれないか。」

「わかった！店番しているから、よろしくね！」

くだもの屋のおじさんは、急いで、おじさんの家へ向かいました。

「よし、がんばるぞ。でも、おじさんの家、遠いんだよね。あーあ、1日かかるかもしれない

なあ。」

ニコラはそう考えると少しめんどくさくなりましたが、マウ姫様とガク王様の顔を思いうかべて、何がなんでもがんばろうと決めました。

おじさんのお店は、市場でも大人気なので、次から次へとお客さんが来て、目の回るいそがしさです。

「オレンジを10個ちょうだい。」

「ブドウをおねがい。そこの、つぶが大きいやつね。」

「ちょっと、こっちも待ってるんだよ。早くしておくれよ。」

「イチゴって言ったのに、さくらんぼが入ってるわよ。」

「おつりがちがうじゃないか。」

朝から夕方まで、少しの休みもなくこんなふうで、ニコラは、お昼ごはんも、夕ごはんも、食べられませんでした。

「あー、おなかすいたよー。グーグーいってるよー。おじさん、早くもどってこないかな。」

ニコラが、たまりかねて弱音をはいたとき「もし」と声をかけてきたネコがいました。黒っぽい布で深くほおかむりをしています。

「ずいぶんと、おなかすいているようだね。何か食べてきたらどうだい。その間は、わたしが店番を代わっておくよ。」

ニコラは、とつぜんのことでびっくりしましたが、なにしろ、おなかすいていたので、思わず喜んで言いました。

「え、見知らぬ人だが、いいのかい？助かるよ、ほんとに。あたい、食べるの早いから、10分もあればもどってくるよ。じゃあ、よろしくね。」

ニコラはそう言うと、飛ぶようにお店をはなれていきました。

黒っぽいほおかむりのネコは「ひひ」と笑いました。

5分後、お店のおじさんがもどってきました。

「おーい、ニコラ！持ってきたぞ！」

ところが、お店にいたのは、ニコラではなく、見たこともない黒いほおかむりのネコでした。お店のおじさんは言いました。

「だれだ、おめえ。」

ほおかむりのネコは言いました。

「わたしは、ニコラにたのまれて、店のるすばんをしていたんだよ。ニコラは、急におなかをこわして、家に帰っちゃったんだ。それで、おじさんから、リンゴをあずかって、ニコラの家にとどけるように言われているんだよ。」

「ふむ。そんなことなら、ニコラが自分で書いたメモか何か、あるはずだけどな。こんなだいたいなリンゴなのに。」

「い、いやいや、わたしはニコラの大親友なんだ。わたしが言うことは、ニコラの言うことだよ。よっぽどおなかが悪いとみえてね、飛んで帰っちゃったんだよ、ほんとに。」

「そうか、それなら。」

おじさんは、黒いほおかむりのネコに、紙包みをわたそうとしました。その時、

「あ、おじさーん、おかえりなさい！」

向こうから、ニコラがドタドタと走ってきました。

「あれ、おまえさん、急にはらをこわしたんじゃないのかい。」

「え、なんの話だい。」

「いや、このほおかむりのやつがな…」

おじさんとニコラがふりかえると、そこには、もうだれもいませんでした。

「あ、ほおかむりのネコね。あたいが、あんまりおなかをすかせているのを見かねて、店番をほんの少し代わってもらっていたんだよ。」

「なに、話がちがうじゃねえか。ニコラがはらをこわしちゃったもんで、自分があずかって、ニコラにとどけるんだ、なんて言っていたぞ。」

「え、あたい、そんなこと、一言も言ってないよ。さっきのネコ、いったい、何者だろう。」

「ふむ。あいつ、もしかして、ピア兄弟いちみじゃねえか。」

「え、あの、ちゃっかりもので、いつも王様のごきげんをうかがっている、ピア兄弟かい？」

「ああ。今回のマウ姫様のことでも、ちゃっかり手がらをたてようと思っているんだろう。まったく、ゆだんもすきもないやつだ。」

「そうだったんだね。あぶないところだったなあ。」

ニコラとくだもの屋のおじさんは、ほっとむねをなでおろしました。そして、ニコラが言いました。

「ところで、おじさん、リンゴを見せておくれよ。」

「おう、これだよ。」

ニコラは、おじさんが持ってきてくれた紙包みを開けてみました。すると、中に、オレンジ色のくだものが入っていました。ニコラはまっさおになりました。

「おじさん！マウ姫様を助けるには、リンゴがひつようなのに！オレンジじゃないよ！」

「ああ、それは、リンゴだよ。ふつうのリンゴと色がちがうけどな、それほどうまいリンゴはないぜ。」

「これがリンゴ？へえ、やっぱり、いちばんおいしいものは、見た目もちがうんだね。おじさん、本当にありがとう。」

ニコラは、紙包みをかかえて、市場を出、お城へ向かいました。

## スパイス

---

スパイスは、頭からしっぽまでダークブラウンで、かしこそうな顔をしています。耳が少し大きめで、その大きな耳をいつもピンと立てて、王国中のじょうほうを集めています。

王国一のちえしゃのスパイスは、この世で最高のリンゴが、一体どこにあるのか、うでを組んで考えました。

「この世で最高のリンゴということは、マウ姫様がもっとも好きなリンゴのはずだ。それならば、マウ姫様がいつも遊んでいる、お城の庭にあるにちがいない。」

スパイスは、広い広いお城の庭をさがすことにしました。

お城の庭の入り口で、黒いほおかむりのネコに会いました。いっしゅん、

「ん？お城でほおかむりなんて、おかしいな。」

と思いましたが、お城はいろんな人が行きかうので、スパイスはそのまま声もかけず、庭へ入りました。

お城の庭はとても広いのです。丘があれば、小川もあり、畑や田んぼがあり、林や森もあります。はしからはしまで歩くだけでも、1日かかります。リンゴの木なんて、どこにあるのか、さがすだけでもひとくろうです。そこで、スパイスはまず、マウ姫のめし使いの子ネコたちに聞いてみました。

「マウ姫様が一番お気に入りのリンゴの木が、この庭にあるはずです。めし使いさんたち、それがどこにあるか、ごぞんじですか？」

「みゃあ。たしかに、マウ姫様お気に入りのリンゴの木があります。でも、マウ姫様は、ご自分のことは、ほとんど、ご自分でされるのです。リンゴをお取りになる時も、わたしたちにひみつで行かれて、わたしたちにいつも、1つずつくださったのです。みゃあ。」

「そうなのですか。そのリンゴ、おいしいですか？」

「みゃあ。それはもう。ふつうのリンゴとは、くらべものになりません。そして、見た目も...」

「見た目が、どうかしたのですか？」

「みゃあ。赤い色のリンゴではないのです。それはそれは、きれいな緑色なんです。」

「なんと。緑色ですか！」

スパイスは、めし使いさんたちにお礼を言うと、とにかくさがしてみようと、庭の森へ行ってみました。スパイスの思ったとおり、庭の森には、いろんなくだものの木がありました。

「実が緑色ということは、見つけにくいな。葉っぱと同じ色じゃないか。」

スパイスは、森の果樹園を歩き回りました。オレンジの木、ブドウの木、バナナの木。おいしそうなくだものがたくさんなっています。お城の果樹園だけあって、どのくだもの木も手入れが行きとどき、それはそれは大きくておいしそうなお実ばかりでした。もちろん、リンゴの木もありましたが、それはまっかなリンゴでした。

「たしかに、おいしそうなおリンゴだが、めし使いさんたちが言っていたリンゴとはちがう。」

スパイスは、歩いて、歩いて、とうとう、庭のはしっこの高いへいまでたどりついてしまいました。

「うーん。やはり、マウ姫様にしか、わからないのか。」

スパイスは、へいによりかかって、しゃがみこんでしまいました。すでに日がくれかけています。山のほうからすずしい風がふいてきて、スパイスのあせをやさしくなでてくれました。

と、そのとき、とてもあまい、すてきなかがりかおりがただよってきました。今までかいたことのないかがりです。

スパイスは思わず、そのかがりに引きよせられて、ふらふらと立ち上がり、歩いて行きました。

へいにそって歩いていくと、小さなあなが開いているところがありました。そのかがりは、そこからただよっているようです。

「いったい、なんのかがりだろう。」

スパイスがあなをのぞいてみると、へいの外に、小さなリンゴの木がありました。その実はなんと、緑色をしています。

「あ！緑色のリンゴじゃないか！こんなところにあったのか！そうか、マウ姫様はお体が小さいから、このあなからぬけ出されて、あのリンゴをお取りになっていたにちがいない。だから、めし使いさんたちにもひみつだったんだな。」

しかし、スパイスには、その小さなあなをくぐることは、とてもできません。でも、手をのばせばとどきそうです。スパイスは、あなの中にうでを入れて、思いきりのばしました。指先がコツンとリンゴにふれました。でも、つかむことができません。

「へいは高すぎてこえられない、なんとか、つかむしかない。」

スパイスはちぎれそうになるくらい、あなから何度も何度も、うでをのばしました。うでのつ

けねが、へいでこすれて、血がにじみ出そうです。それでもあきらめずに、根気よく、100回目にちょうせんしたとき、ビューッと強い風がふきました。そのはずみで、リンゴが大きくゆれ、スパイスの手におさまったのです。

「よし！マウ姫様の一番好きなリンゴを手に入れたぞ！」

スパイスは、うでをさすりながら、緑色のリンゴを持って、庭の出口へ向かいました。

出口に着いたとき、見おぼえのある黒いほおかむりのネコが立っていました。

「おや、おまえさんは、たしか、朝もここにいたね。」

きおく力の良いスパイスは、思い出して、言いました。

「ああ、そうだよ。わたしはここで、めぐまれない子ネコたちのために、こうやって、みんなから食べ物を集めているんだ。」

黒いほおかむりのネコは、手に持っていた大きなカゴをスパイスに見せました。そこには、魚のほねや、キャットフードのかけら、ねずみのしっぽなどが入っていました。

「そうか。いいことをしているね。わたしが今あげられる食べ物といえば、リンゴしかないな。」

そう言って、スパイスは、今、くろうして取ってきたばかりの緑色のリンゴをカゴに入れようとしていました。でも、スパイスは知っていました。朝会ったときには、このネコはカゴなんて持っていなかったことを。ほおかむりを取って、しょうたいをあばいてやろうと、すきをうかがっていました。

と、その時

「あ、このネコです。この黒いほおかむりのやつです。わたしの大切なカゴをひったくっていったのは！」

1人のネコが、けいさつネコをひきつれて、さけびながら走ってきました。

「わたしが、まちで、めぐまれない子ネコたちのために、食べ物を集めていたら、いきなりひったくっていったんです。こいつにまちがいありません。」

「なに、こいつか。まったく、なんてやつだ。」

けいさつネコがそう言って、「お前はだれなんだ。」と、黒いほおかむりを取ると、それは、ピア兄弟の次男でした。スパイスは言いました。

「やっぱり、ピア兄弟か。どうしておまえたちは、自分でどりよくしようとしないんだ。まったく、しょうがないやつだ。」

スパイスは、あきれながら、緑色のリンゴを持って、お城の庭をあとにしました。

ジェイドのきたえた体は、赤毛で、引きしまっています。深い緑色の目には力があります。

そんなジェイドのとくぎは山登りです。ジェイドは考えました。

「空に一番近いところに、世界一のリンゴがあると聞いたことがあるぜ。ということは、この世で一番高い山、エベレネコ山のとっぺんに違いねえな。」

ジェイドは、これまで、いろんな山を登ってきましたが、エベレネコ山は初めてです。さっそく、じゅんびにとりかかりました。山登り用のリュックに、いろんなものをつめこんでいきます。登山用キャットフード、テントにねぶくろ、雨がふったときのためのかっぱ、水とう、などなどです。

じゅんびが終わると、ジェイドはさっそく、エベレネコ山を登り始めました。

そのようすを、山のふもとの木のかげから、だれかがこっそりのぞいていました。

ジェイドがふもとを出発すると、始めは、黄色やピンクのかわいい草花たちが出むかえてくれましたが、ずんずん登るうちに、じゃり道になり、足がズルズルッとすべりやすくなってきました。たおれている木も増えてきて、大きな木の下をくぐったり、上を乗り越えたりしなければなりません。さらにずんずん進んでいくと、大きな岩がいくつも重なっていて、よじ登っては下り、下りてはよじ登りました。さらにさらに進んでいくと、そこは、一歩まちがえれば谷にまっさかさま。ジェイドは、さいしんの注意をはらいながら、それでも、一步一步、山を登っていきました。空気も少しうすくなってきたようです。

「うーん、さすが、この世で一番高い山。こんなに登ってきたのに、とっぺんなんて見えてもこねえや。それに、ここまで登ってきたが、リンゴの木なんて、見当たらねえなあ。つかれたし、ちょっと、休けいにするか。」

ジェイドは、近くの岩にこしを下ろして、水を飲もうとしましたが、水とうはすでに空っぽになっていました。そこで、耳をピンと立ててみると、チョロチョロと、川の流れる音がしたので、川の音のするほうへ行きました。山の川の水は、雪どけ水が流れており、冷たくて、とてもおいしいのです。

「はあ、うめー。」

ジェイドは、水をゴクゴク飲んで、顔を上げました。すると、なんと、川の向こうがわに、リンゴの木があるではありませんか。おいしそうなまっかなリンゴが、たくさんなっていたのです。

「あ、リンゴの木！」

ジェイドは、今までのつかれもわすれて、冷たい川をバシャバシャとわたり、向こう岸へたどり着きました。そして、さっそく、リンゴをひとつ取って、かじってみました。

「う、うまい！こんなうまいリンゴ、生まれて初めてだ！」

そう言って、あたりを見回してみると、リンゴの木がたくさんあることに気づきました。ジェイドは、いろんな木のリンゴを食べてみましたが、どうやら、やはり、てっぺんに近づけば近づくほど、リンゴはおいしくなるようです。

ジェイドは、リンゴの木をたどりながら、ずんずん、ずんずん、山を登りました。

そして、とうとう、エベレネコ山のてっぺんに着いたのです。

みると、そこに1本のリンゴの木が立っており、なんと、青色のリンゴがなっているではありませんか。

「え、これ、リンゴか？」

ジェイドは、おそるおそる、その青いリンゴを1つ取って、かじってみました。

「...う、うまあ！なんだ、この味。ひとくちかじると、すんだ青空のような、すがすがしい気分になるぜ。空に一番近い場所のリンゴだからな。きっと、これが、この世で最高のリンゴにちがいねえ！」

ジェイドは、そうかくしんすると、その青いリンゴをリュックにつめて、山を下りました。

山のふもとに着き、さあ、お城へ急ごうと走り出したとき、黒い布にくるまって、たおれているネコがいるのを見つけました。

「おい、こんなところでたおれて、一体、どうしたんだい。」

ジェイドが声をかけると、たおれているネコは、弱々しい声で言いました。

「もう3日も、なんにも食べていないのです。おなかはペコペコだし、のどはカラカラ。どうしても、リンゴを食べて、おなかをみだし、のどをうるおしたいと思っていたのですが、こんなところで動けなくなってしまったのです。」

「そうだったのか。気のどくに。あ、そういうことなら、オレは今、この世で最高のリンゴを持

っているんだ。これなら、いっぺんで元気になるぜ。」

「でもきっと、大変なくろうをして、見つけたリンゴでしょう。そんな大切なもの、いただけません。」

「いや、このリンゴは、山のとっぺんにあるから、また取りに行けばいいのさ。」

「そうですか。なんてやさしいおかただろう。それでは、えんりょなくいただくとうしましょう。」

黒い布のネコは、布から手だけ出して、ジェイドのほうに差し出しました。すると、ジェイドは言いました。

「おや？3日も何も食べていないわりに、ふっくらした手をしているね。」

黒い布のネコは、ヒュッと手を引っこめて、あわてて言いました。

「あ、これは、たおれたひょうしに、岩にぶつかって、はれてしまったのです。」

「そうか、気のどくに。じゃあ、オレが口まで持って行ってやるから、かじれ。」

「ありがとう。」

黒い布のネコは、布から口だけ出して、ジェイドに向かって大きく口をあけました。すると、ジェイドは言いました。

「おや？3日も何も食べてないわりに、口の中は、食べ物のカスだらけだな。」

黒い布のネコは、あわてて口をカプツとしめて、言いました。

「あ、これは、ええと、その」

そのようすを見て、変に思ったジェイドは、黒い布をバサッと取ってみました。

「あ、おまえ、ピア兄弟じゃないか！さては、マウ姫様のリンゴを横取りして、王様に取り入るつもりだったな！」

正体がばれてしまったピア兄弟の三男は、ジェイドのケンカの強さを知っていたので、いちもくさんににげていきました。

「まったく、ピア兄弟め、しょうがねえやつだな。」

ジェイドは、気を取り直して、お城へ急ぎました。

ハルは、白に黒ぶちの小さなネコ。ねるのが大すきで、1日のうちほとんどは、丸くなってねています。

しかし、今回は、大好きなマウ姫様のために、ねむけまなこをこすりながら、いっしょうけんめい、ぼんやりと考えました。

「たしか、ゆめの中でリンゴを食べて、いちばんステキだったのは、草原の中に1本だけ立っていたリンゴの木だったなあ。あふっ。」

ハルは、あくびをしながら、さっそく、その草原を目ざして出発しました。でも、なにしろゆめの中でのできごと。どこにあるやら、さっぱりわかりません。

「まあ、道を歩いていれば、いつかたどりつくよう。あふっ。」

ハルは、あてもなく、王国中の道という道を歩き回りました。

そのようすを、木かげから、だれかがこっそりと見ていました。

「あれ？ここ、さっき通った道かな。ま、いいかあ。あふっ。」

ハルは、いつもねむってばかりで、ろくにおさんぽにも出かけないので、道のことがよくわかりません。何度もまいごになりながら、とにかく道を見つけては、歩いていきました。

知らない道に入ると、少し不安になりました。そんな時は

「♪ 歩こう 歩こう ネコの道。どこへも行ける ネコの道。あくびは友達 にゃーにゃーみゃー ♪」

と、でたらめな歌をうたいながら、元気を出して歩きました。ねむいのをひっしでこらえて、今にも横になりたいのをガマンしながら、とにかく、ゆめで見た草原を思いうかべて、歩いていきました。

「うーん、あの草原、やっぱり、ないのかなあ。ああ、日がくれてきたよ。ねむたいなあ。あふっあふっ」

ハルは、少し休けいしようと、そばにあった大きな木の下に、とうとう横になってしまいました。そして、うとうとしていると、あの草原が、またゆめに出てきました。

「そうそう、この草原。ここに行きたいんだよう。」

ハルは、自分のねごとで目をさました。すると、目の前には、ゆめと同じふうけいが広がっていたのです。ハルは飛び起きて、あたりを見回してみました。

「・・・ということは。」

ハルは、上を見上げてみました。すると、リンゴがなっていたのです。それは、ステキな<sup>のい</sup>藍色のリンゴでした。

「ああ、これ、これ！この<sup>あい</sup>藍色のリンゴだ！ゆめの中だけじゃなかったんだあ。よかった、よかったあ！」

ハルは、木によじのぼり、その<sup>あい</sup>藍色のリンゴをとりました。

そして、木を下りると、そこに、黒いほおかむりをしたネコが立っていました。

「ん？あなたは、だれだい？」

ハルがたずねると、そのネコは答えました。

「わたしは、ゆめの中に住む、ゆめネコだよ。今は、お前さんのゆめの中にいるんだよ。」

「ええ。これは、あたしのゆめだっていうのお？」

「そうさ。おまえさんは、今、ぐっすりねむっちゃってる。たぶん、このままでは、ずっと起きられないと思うよ。」

「そんなあ。それはこまるよ。あたし、マウ姫様にこの世で最高のリンゴをとどけないといけないのに。今、それを見つけたところだったんだよう。」

「でも、それもゆめ。早くめざめて、またさがしに行かないと、マウ姫は助からないよ。」

「で、でも、どうやって起きればいいのかなあ。」

「それはかんたん。ゆめの中のゆめネコに、ゆめの中で見つけた一番たいせつなものをわたせばいいのさ。」

「そうなのかあ。じゃあ、かんたんだね。この<sup>あい</sup>藍色のリンゴをわたせばいいんだねえ！」

「そうそう。さあ、そのリンゴをわたしなさい。」

ゆめネコは、ハルのリンゴに手をのぼしました。ハルは、手に入れたばかりの<sup>あい</sup>藍色のリンゴを手わたそうとしました。

その時、1ぴきのハチがブーンと飛んできて、ふたりのまわりをくるくる回ったかと思うと、ゆめネコの顔をチクリ！

「あいたたた！ハチにさされた！いたいよう！」

「あ、ゆめネコさん、だいじょうぶかい。...あれ、でも、おかしいな。ゆめの中では、いたさは感じないはずなのに。」

ハルがふしぎがってゆめネコを見ていると、いたさで飛びはねていたゆめネコのほおかむりがとれました。

「あ、ちゃっかりもののピア兄弟！あたしのリンゴを横取りしようとしていたんだなあ！」

ピア四男は、いたさにひめいをあげながら、にげて行ってしまいました。

そしてハルは、また、でたらめな歌を歌って、道にまよいながら、お城へと向かいました。

## パルコ

---

パルコは、<sup>こうきしん</sup>好奇心いっぱい、いつも元気に遊んでいます。こいグレー色で、手足は細く、すばしっこく動くのがとくいです。まん丸の目をかがやかせて、毎日、何か楽しいことはないかと、せわしなく動きまわっています。

そんなパルコですから、わくわくしながら、リンゴさがしに出発です。

「ぼく、こういうたんけん、大好きさッ。この世で最高のリンゴ、いったいどこにあるのかなッ。たんけんといえば、やっぱり、ヘルメットにライトをつけて、暗いところに行かなくちゃッ。暗いところ、暗いところ。そうだ、どうくつだッ。」

パルコは、たんけん道具をそろえて、王国で一番大きなどうくつへ向かいました。

どうくつの入口の岩かげで、だれかが、こっそりのぞいていましたが、どうくつの中に飛びこんでいったパルコが、そのけはいに気づくはずありません。

どうくつの中は、暗くて、ひんやり。水がチョロチョロと流れる音や、ピチヨンピチヨンと水てきが落ちる音が聞こえます。そして、どこかで、コウモリがバサバサと飛んでいるようです。

「きみが悪いけど、これこそ、たんけんだッ！さてさて、リンゴ、リンゴはどこかなッ。」

パルコは、ぬるぬるの地面に足がすべらないように注意しながら、どうくつのおくへおくへと少しずつ進んでいきました。その時です。

「チュー、チュー」

1ぴきのネズミが、パルコの前にあらわれました。ネズミは、パルコの大こうぶつです。

「あ、ネズミだッ！しかも、どうくつのネズミなんて、最高級じゃないかッ。こんばんのカレーにいれてやるッ。待て待てーッ！」

パルコは、リンゴのことも忘れて、ネズミを追い回しました。ネズミは、どうくつの中を走り回り、その後をパルコも全速力で追いかけていきます。

「こらーッ！待てーッ！」

パルコは、とうとう、どうくつの行き止まりまで、ネズミを追いつめました。

「よしッ！最高級ネズミ、ゲットだッ！」

ネズミをつかまえようと、手をのばしたしゅんかん、

「いてッ！」

何かが頭に落ちてきました。ヘルメットのライトを向けてみると、どうくつのすみっこの池の

ほうへ、何か黄色くて丸いものが転がっていくのが見えました。

「アッ！リンゴだッ！黄色いけど、あれはたしかにリンゴだぞッ」

なんと、どうくつのリンゴを発見したのです。黄色いリンゴは転がって、今にも、どうくつの池に落ちそうです。でも、目の前には、大こうぶつのネズミがいます。手を引っ込めれば、すぐににげてしまいます。

「あああー、どうくつのネズミなんて、もうお目にかかれなくてもいいのにッ…。こいつを入れたカレーほど、ぼくの好きなものはないんだッ。まるごと1ぴき入れて、好きなだけ食べられると思ったのにッ…。」

そうするうちに、リンゴは池のふちへと転がり、グラグラ。ほとんど池の方へかたむいています。それを見て、パルコは、思い直しました。

「いや！ぼくは、マウ姫様のためにここに来たんだッ。よしリンゴをひろうぞッ！」

パルコが手を引っこめたしゅんかん、ネズミは「チューッ」とさけんで、いちもくさんににげていってしまいました。でもパルコは、ネズミをふりかえりもせずに、全速力で池のほうへ走り、黄色いリンゴをひろうことができました。

「よしッ。これでマウ姫様をおすくいすることができるぞッ！」

パルコは、自分の気持ちに勝ったすがすがしさと、マウ姫様とガク王様のお役に立てるほこりでいっぱいでした。

パルコが、意気ようようと、どうくつから出てくると、何か、いいにおいがただよってきました。

「ん？このにおいは…。どうくつネズミカレーのにおいだッ！」

見ると、黒いほおかむりをしたネコが、向こうの岩かげで、ナベの中をかき回していました。パルコは、においにつられて、そこへ走っていきました。

「やあ、黒いほおかむりのネコさん。これは、どうくつネズミのカレーだねッ。」

「そうだよ。今日、めずらしく手に入ったから、1週間分作って、毎日食べるのさ。」

パルコは、ナベの中を見ながら、ゴクリとつばを飲みこみました。

「あのさッ、これ、1日分でいいから、わけてくれないかなッ。」

「さあ、どうしようかな。なにしろきちょうなものだし、ただであげるわけにはいかないよ。」

パルコは、今にもよだれがたれそうです。

「そうだよねッ。じゃあ、お金をはらうよッ。いくらだい？」

「いや、お金なら、いらぬよ。このカレーに代わる、何かめずらしいものをおくれ。」

「めずらしいものっていったってッ…」

「おや、ぼくは知っているよ。さっきから、どうくつリンゴのかおりがプンプンしている。手に入れたんだろう？そのリンゴとしか、こうかんしないよ。」

パルコは、カレーを目の前にして、食べずにはいられない気持ちになっていました。リンゴなら、さがせばまた見つかるかもしれない、なんて思ってしまったのです。

「じゃ、じゃあ、このリンゴとこうかんしようッ。」

パルコは、黒いほおかむりのネコに、さっきひろった黄色いリンゴを差し出しました。その時、

「バサバサバサッ」

コウモリのたいぐんが、カレーのいいにおいをかぎつけて、黒いほおかむりのネコにむらがってきました。そのひょうしに、ほおかむりが飛ばされてしまいました。

「あ、おまッ、ちゃっかりもののピア兄弟じゃないかッ。」

「ちえっ、ばれちまっちゃ、しょうがない。」

ピア五男は、コウモリのたいぐんに追われながら、ナベをかかえてにげて行ってしまいました。

「あぶない、あぶない。マウ姫様の大事なリンゴを失うところだったッ。おいら、きをつけなきゃッ。」

パルコは少しはんせいしましたが、黄色いリンゴを手に入れて、意気ようようと、お城へ向かいました。

ミーは、白い毛がふさふさで、大がらなネコです。目はアイスブルー。おしゃれで、変わったものを集めるのがとくいです。

「黒魔女の魔法をとくようなリンゴなんて、とても変わったリンゴにちがいないわ。ありそうもないところに、きっとあるはず。どこかしら。」

ミーは、これまでに変わったものを集めた場所を、いろいろ思い出してみました。

「あ、そういえば、私の変わった宝物の中で、特に変なものは、だいたい、川原でひろったものだわ。よし、さっそく川原に行ってみよう。」

ミーは、いつもさんぽする川原へ行ってみました。川原には、上流から流れ着いた、いろんな変わったものがあるのです。すると、さっそく、何かを見つけました。

「まあ、きれいなスズ。穴が3つもあいているからヘンな音。おもしろーい。宝物箱に入れよう。あら、すてきなピンクのリボン。魚がかじって、ギザギザ。あたまでちょうちょむすびしたら、おしゃれねー。」

ミーは、川原を歩いて、いろいろ集めましたが、かんじんのリンゴが見つかりません。

「やっぱり、リンゴなんて、流れてこないのかしら。」

ミーは、集めた宝物をかかえながら、川の上流を見つめていました。

しばらく岩の上に座って見ていると、川の上流に、むらさき色の大きな丸いものがプカプカと、うきしずみしているのが見えました。

「あれ、何かしら！あんなもの見たことないけど…。あ、リンゴだわ！」

とても大きくて、むらさき色でしたが、それはたしかにリンゴでした。

「わあ、あんな変わったリンゴ、絶対に、マウ姫様の魔法をとく力があるにちがいないわ！」

ミーは、そのリンゴを取ろうと思いましたが、じつは、泳ぐことができません。

「ああー、どうしよう。このままじゃ、流されていっちゃう。」

むらさき色のリンゴは、今にもミーの目の前を流されていきそうです。

「マウ姫様のためだ！ぜったいに手に入れなくちゃ！えい！」

そう言うと、ミーは、川にバシャーンと飛びこみました。ひっしでバシャバシャ泳ぎましたが、リンゴはどんどんはなれていきます。

「ああー、おぼれそうー。でも、リンゴがー！」

ミーは、リンゴをめざして、とにかく泳ぎました。すると、大きな岩のところで、リンゴがひっかかり、止まっているのが見えました。

「よかった！とにかく、あそこまで泳ごう！」

ミーは、半分おぼれながら、バシャバシャと泳ぎ続け、やっと、リンゴにたどりつきました。でも、ミーがリンゴにつかまったはずみで、ひっかかっていた岩から、リンゴがはなされてしまいました。

「ああ、流される！」

ミーがつかまったまま、リンゴは流れ始めました。ところが、川の流れのおかげで、そのまま、どんどん岸へ近づいていきました。

そして、とうとう、岸にたどりつくことができたのです。

「はあ、よかった。これで、マウ姫様を、おすくいできるかもしれないわ。」

と、その時、黒いほおかむりのネコが、ミーの目の前にあらわれました。

「やあ、おじょうさん、大変だったようだね。川でとれた、むらさき色の大きなリンゴは、どんな病気も治すことができるよ。」

「まあ、やっぱりそうなのね。よかったわ。」

「しかし」

黒いほおかむりのネコは言いました。

「そのままではダメだ。1ヶ月ほどかけて、そのリンゴを、日にさらして、さとうをかけて、日にさらして、さとうをかけて...と、毎日手をかけてやらねばならないのだ。」

「えー、1ヶ月も！マウ姫様も、ガク王様も悲しまれるわ。でも、やるしかないわね。」

「いや、やらなくてよい方法もある。」

「え、そうなの。ぜひ、教えてくださいな。」

すると、黒いほおかむりのネコは、干からびて小さくなったリンゴを差し出しました。

「これは、わたしが、1ヶ月前に取ったむらさきリンゴで作ったものだよ。これと、今あなたが取ったリンゴと、こうかんということで、どうだい。」

「え、いいんですか！それは、もう、ありがたいことですわ。」

ミーは、その干からびたリンゴを見せてもらいました。変わったものを集めるのが好きだけあって、物を見るときにミーの目は、とてもするどいのです。そして、ミーは言いました。

「あら、これ、色がむらさき色じゃなくなっているわ。」

「あ、ああ、ドライフルーツは、色が変わっていくものなんだよ。」

「ふうん、なるほど。」

変わったものの好きのミーは、その干しリンゴを、さらにしげしげとながめました。

「あ、それから」

「まだ、何かあるのかい。」

「ええ。よく考えたら、アップルパイに干しリンゴは使えないわ。しんせんで歯ざわりのいいものじゃなければ、きっと、マウ姫様の好きなアップルパイにならないと思うの。」

「いや、そんなことはない。干してこそ、きき目があるのだ・・・。」

ほおかむりのネコが、あわてて言うと、ミーはまた言いました。

「ふうん。それから、この干しリンゴ、ふつうのリンゴのかおりしかないわ。このむらさきリンゴどくとくのいいかおりがないわ。」

「い、いや、それも、干しているうちに、かおりが変わっていくのだよ。」

「そうなの？けっきょく、ふつうの干しリンゴと変わらないじゃないの。」

「い、いや、見た目はそうかもしれないが、きき目はまったくちがうのだ。」

ミーは、するどいアイスブルーの目で、黒いほおかむりのネコをじっと見て、言いました。

「それから、ほおかむりネコさん、あなた、ピア兄弟ね。いくらほおかむりしたって、そのデブと太ったおなかや、人のものを横取りしようとするネコなで声は、わたしにはかくせないわよ。」

ミーにすっかり見抜かれてしまい、びっくりしたピア六男は、言いわけもせずに、その場から走りさってしまいました。

「うふふ。ミー様をだまそうとしてもむりよ。さあ、こうしちゃいられないわ。お城へ急がなきゃ。」

ピア兄弟のさくりゃくをみごとに見抜いたミーは、大きなむらさき色のリンゴをかかえて、お城へ向かいました。

サトは、やわらかい茶色の、背の高いネコです。

まゆげの間にいつもしわをよせて考えごとをしています。「にゃあにゃあ ぶつぶつ」と、よくひとり言を言っていますが、考えに答えが出ると、いつも、ピューッと行動にうつします。

マウ姫様のリンゴのことも、まゆげの間にしわをよせながら「にゃあにゃあ ぶつぶつ」と考えていました。

「この世で最高のリンゴ。マウ姫様を助けるリンゴ。アップルパイにさいてきのリンゴ。うーん、やっぱり、あそこでさがすしかないな。ぶつぶつ。」

サトは、答えが出ると、ピューッと走り出しました。行き先は、王国で一番大きなリンゴ園です。

リンゴ園の入口で、黒いほおかむりをしたネコが、こっそり、サトのようすをうかがっていました。

王国一のリンゴ園のリンゴの実は、ぜんぶ赤色でしたが、木ごとに、大きいものや小さいもの、じゅくしたものやじゅくしていないもの、まっかなものや色のうすいものなど、いろんなしゅるいがありました。

「さて、ここで最高のリンゴを見つけよう。アップルパイのための最高のリンゴは、調べたところ、まっかで、ほどよくすっぱいリンゴなんだ。ぶつぶつ」

サトは、まず、まっかなリンゴをさがしました。

リンゴ園を一周して、それぞれの木から1個ずつ、リンゴを100個、集めました。

「この中から、なるべく赤いを選んでみよう。ぶつぶつ」

サトは、両方の手にリンゴを持って、かわるがわる色をくらべ、赤いリンゴ50個を選びました。

「この中から、いちばんほどよくすっぱいのを選ぼう。それをしらべるには、かじるしかない。ぶつぶつ」

サトは、1つずつ、まっかなリンゴをかじっていきました。

でもじつは、サトは、とっても小食。いつも、朝ごはんは、かつおぶしひとかけら、お昼ごはんは、キャットフードひとくち、夕ごはんは、ミルクひとくちで、おなかいっぱいになってしまうのです。こんなにたくさんのリンゴは、もちろん、食べたことはありません。

だから、10個もかじると、おなかいっぱいになってしまいました。すでにおなかはパンパンです。

「ふうーっ。やっと10個かじったぞ。ちょうどいいすっぱさのリンゴもあったけれど、あとの40個の中に、もっとほどよくすっぱいものがあるかもしれない。もうおなかがいっぱいだけど、かじらなければ、わからない。マウ姫様のために、がんばらなければ。ぶつぶつ。」

サトは、ひたすら、リンゴをかじり続けました。20個、30個、40個……。おなかがまんまるにふくれあがってきました。もうげんかいです。

「ああー、もう1個も食べられないよ。まだ10個も残っているのに。ぶつぶつ」

サトは、どうしたらいいのか、とほうにくれて、残りの10個のリンゴのまわりを、おなかをひきづりながらぐるぐる歩き回り始めました。「どうしよう、ぶつぶつ」と言いながら、ぐるぐる、歩き回り続けました。そうするうちに、日がくれてきました。

「ああ、ずいぶん、ぐるぐる歩き回ってしまったなあ。むだな時間をすごしてしまった。ぶつぶつ」

しかし、その時、おなかが地面にくっついていないことに気がついたのです。

「あれ、ひきずっていたおなかが、少し小さくなった。そうか、運動したから、小さくなったんだな。よし、まだ食べられそうだ。ぶつぶつ」

サトは、元気を取りもどして、1個かじっては歩き回りながら、最後の10個をかじり、なんとか全てかじることができました。

全てかじったころには、あたりはすっかり夜になり、まんまるのお月様が顔を出して、そんなサトを見守っていました。

「よし、一番ほどよくすっぱいリンゴが、わかったぞ！」

サトは、はれつしそうなおなかをかかえて、一番ほどよくすっぱいリンゴの木から、リンゴを取りました。その木には、あと1つしか実がなっていないませんでした。

「さいごの1つだな。マウ姫様に大切におとどけしなくては。ぶつぶつ」

そして、月の光に照らされて、リンゴ園を出ようとする、木のかげから、黒いほおかむりのネコがあらわれました。後ろから照らす月の光の <sup>ぎゃっこう</sup> 逆光 で、顔がよく見えません。

「黒いほおかむりのネコさん、こんなおそい時間に、ひとりでどうしたんだい？ぶつぶつ」

サトが話しかけてみると、黒いほおかむりのネコは、いきなり、エーンと、泣き出しました。「さがしているものが見つからなくて、今日1日中歩き回っていたんだけど、つかれて、もう歩けないのです。」

「そうか、それは大変だったね。」

あ、つかれているときには、すっぱいものもいいんだよ。ここにこのリンゴ園でいちばんほどよくすっぱいリンゴがある。これをあげるよ、ぶつぶつ」

「え、でも、それはあなたの大切なものではないのですか。」

「いいんだよ。目の前にこまっている人がいるんだから、ほうっておくわけにはいかないよ。さあさあ、あそこに、すわるのにちょうどいい岩がある。そこにすわって、ゆっくり食べな。ぶつぶつ」

「ありがとう。じゃあ、えんりょなく。」

黒いほおかむりのネコは、月の逆光に安心してほおかむりをとりました。

ふたりは、近くにあった大きな岩にこしかけました。

そして、サトが苦労して見つけたリンゴを、黒いネコにわたそうとした、そのとき、お月様がいちだんとまぶしく、ふたりを照らし出したのです。

すると、そこにすわっていたのは、月明かりに照らし出された、ピア七男でした。

「あ、おまえ、ピア兄弟じゃないか！」

ピア七男は、いきなり名前を呼ばれて、びっくりしました。

「あ、しまった、<sup>ぎゃっこう</sup>逆光で見えないと思って、ほおかむりを取ってしまった！」

「ゆだんしたな。お月様が、おまえのしょうたいを教えてくれたよ。またちゃっかり、人のてがらを横取りしようとしていたな。まったく。ぶつぶつ」

ピア七男は、あわてて、いまさらほおかむりを結びなおして、にげさって行きました。

リンゴを取り返したサトは、月の光に照らされながら、リンゴ園をあとにして、お城へ向かいました。

## アップルパイを焼こう

---

お城では、ガク王様が、今か今かと、7人の帰りを待っていました。

すると、7人が続々と帰ってきました。それぞれが、大きいの、小さいの、そしていろんな色のリンゴを持っています。

「おお、みんな、本当によくやってくれた。心から礼を言う。つかれているところ悪いが、さっそく、それぞれのリンゴで、マウ姫のアップルパイを作ろう。お城一番のシェフ、レツに作らせよう。」

王様の横には、長いコック帽をかぶったネコが立っていました。

「これは、本当に、すばらしいリンゴばかりですね！僕はマウ姫様が生まれた時から、アップルパイを焼いているんです。あとは、ぼくにまかせてください。」

そう言うと、レツはさっそく、アップルパイを作り始めました。しんけんに、心をこめて、手ぎわよく、リンゴの皮をむき、スライスし、パイきじを重ね、いよいよオーブンへ入れました。

しばらくすると、なんともいえない、いいにおいがしてきました。リンゴとパイきじ、シナモンがほどよく合わさった、とてもいいにおいです。そして何より、みんなの心がつめこまれました。

いよいよ、7つのアップルパイの焼き上がりです。オーブンから出したアップルパイは、どれも、パイきじがツヤツヤとかがやき、中身のリンゴはそれぞれ、変わったステキな色をしていました。

ガク王様は言いました。

「では、さっそく、マウ姫のところへ持っていこう。」

マウ姫は、部屋のベッドで、死んだように眠っていました。みんなで、焼きあがったばかりのアップルパイを運びこみ、ガク王様が、ひと切れずつマウ姫の口元へ持っていくのを、かたずをのんで見守りました。

まずはニコラのオレンジ色のアップルパイです。レツが言いました。

「これは、ネコ王国内のグルメたちの間でも、もんくのつけようのない、かんぺきなリンゴです。おいしさは、これを超えるものはないでしょう。」

ガク王様は、オレンジ色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫の口は開きません。ニコラは涙をためて、マウ姫を見つめるしかありませんで

した。

次は、スパイスの緑色のアップルパイです。レツが言いました。

「これは、マウ姫がいちばん好きなリンゴで作ったアップルパイです。これまでも、何度も、姫様にたのまれて、このリンゴでアップルパイを焼いてきました。きっと、大好きなはずです。」

ガク王様は、緑色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫の口は開きません。スパイスは、天をあおぎました。

次は、ジェイドの青色のアップルパイです。レツが言いました、

「これは、ネコ王国で、いちばん空に近い場所のリンゴです。空の心をきゅうしゅうして、ひとくち食べれば、青空のような、すがすがしい気持ちになるはずです。」

ガク王様は、青色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫の口は開きません。ジェイドは、くやしくて悲しくて、後ろを向きました。

次は、ハルの<sup>あい</sup>藍色のアップルパイです。レツが言いました。

「これは、まことにめずらしいものです。ゆめを見たものしか見つけることができません。わたしも初めて見ました。」

ガク王様は、<sup>あい</sup>藍色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫の口は開きません。ハルは、あくびも忘れて、立ちつくしました。

次は、パルコの黄色のアップルパイです。レツが言いました。

「これは、ネコ王国内で、最高級のリンゴと言えるでしょう。どうくつ内の食べ物は、めったに手に入らないのです。」

ガク王様は、黄色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫の口は開きません。パルコは、その場にかたまってしまいました。

次は、ミーのむらさき色のアップルパイです。レツが言いました。

「これは、きれいな川の水で育つリンゴです。ひとくち食べれば、心身の心配ごとや、不安など、すべて洗い流されていきます。」

ガク王様は、むらさき色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫の口は開きません。ミーは、その場にしゃがみこみました。

とうとう最後、サトの赤いアップルパイになりました。

レツは言いました。

「これは、アップルパイにするのに、最高のリンゴです。すっぱさといい、食感といい、すべてパーフェクトなアップルパイです。」

みんなが、むねに手を組んで見守りました。

ガク王様は、赤色のアップルパイを小さく切って、マウ姫の口元へ近づけました。

しかし、マウ姫が口にすることは、とうとうありませんでした。

ガク王様と、7人と、レツシェフは、声を上げて泣き出しました。

「ああ、最高のリンゴは、すべてそろえたのに、いったいどうして、マウ姫は目覚めないのだ。黒魔女め、美しいマウ姫がそんなにくいか。ああ、マウ姫。一体、どうしたらいいんだろう。」

その時です。部屋の中に、真っ白な光がパアッと広がりました。みんな、おどろいて目をつむりました。しばらくして、そおっと目を開けてみると、マウ姫のかたわらに、真っ白な毛なみで、真っ白な服を着たネコが立っていました。みんな、おどろいて、ぼうぜんとしていたら、そのネコが言いました。

「わたしは、ネコ王国に大昔から住んでいる白魔女です。かわいそうなマウ姫、黒魔女の魔法にかかってしまったのですね。」

ガク王様は、すがるように言いました。

「そうなのじゃ。それで、マウ姫の大すきなアップルパイの中でも、この世で最高のものをあたえてみたのじゃが、姫は、いっこうに目覚めんのじゃ。」

すると、白魔女は言いました。

「ええ、みなさんがいっしょうけんめい集めたリンゴで作ったアップルパイは、どれも、この世で最高のものです。マウ姫も大好きなはずです。あとは、私にまかせてください。」

そう言うと、白魔女は、7つのアップルパイに、シャランシャランと、白い光の粉をふりかけていきました。するとどうでしょう。それぞれのアップルパイが、赤、オレンジ、黄、緑、青、<sup>あい</sup>藍、むらさきにかがやきだし、部屋は7色のかがやきに包まれました。そして、アップルパイは、7色にかがやく1つの大きなパイになったのです。きじは黄金色にキラキラとかがやき、こんがりとした焼き色からはサクサクの食感が、食べなくても伝わってくるようです。そして、パイ

きじの合間からは、にじ色のリンゴの、あまりにもまぶしいかがやきが、あふれだしてしま

。「みなさんの、マウ姫への愛の<sup>けっしょう</sup>結晶のアップルパイです。こんな最高のものは、この世にありません。これで、マウ姫は助かるでしょう。」

そう言うと、白魔女は、再び、白くまぶしい光に包まれて、消えてしまいました。

みんなは、ゆめを見ているような気分でしたが、にじ色にかがやくアップルパイは、たしかにそこにありました。

「よし、これを、マウ姫にあたえよう。」

ガク王様は、ふるえる手で、にじ色アップルパイをひと切れ、マウ姫の口元へもっていきま

すると、マウ姫の口が自然に開き、アップルパイを一口、飲み込んだのです。

「めしあがられた！」

みんなは、飛び上がって喜び、マウ姫が目覚めるのを待ちました。

その時、マウ姫がスウッと小さく息をすい、大きなひとみが開き始めました。

「マウ姫！！」

ガク王様は、マウ姫の手をとり、大きな声で呼びました。すると、マウ姫は、ゆっくりとガク王様のほうを向き、にっこりと笑ったのです。そして、あのかわいい声で言いました。

「お父様、ふしぎなゆめを見ました。7人の勇者たちが、わたくしのために、ふしぎな色のリンゴを集め、それがにじ色にかがやくアップルパイとなり、それを食したとたん、この上もなく幸せな気持ちになったのです。」

ガク王様は、あふれるなみだをぬぐいもせずに、言いました。

「そうか、そうか、マウ姫。よかった、よかった。7人の勇者たちは、ここにおるぞ。」

そう言って、部屋の中にならんでいた7人を、マウ姫の元に呼びよせました。

マウ姫は起き上がって、言いました。

「まあ、ゆめの中と同じ勇者たちですわ。」

7人、それぞれの方法で、最高のリンゴを見つけてくれたのです。

それが合わさったとき、<sup>そうぞう</sup>想像もできないようなパワーが生まれたのです。

ああ、なんてすばらしいのでしょうか。みなさん、本当にありがとう。」

7人は、泣いたり、てれくさそうに笑ったり、喜びに目をかがやかせたりしながら、ひとり

ずつ、マウ姫とあくしゅをしました。

「さあさあ、こうしてはいられない。マウ姫の目覚めを祝って、パーティーじゃ！」

ネコ王国のお城に、ふたたび、喜びが満ちあふれました。

パーティーでは、7人のネコたちが、ひとりずつしょうかいされ、みんなのはくしゅかっさいをあげました。

そして、このことを記念して、ネコ王国の新しい国の旗<sup>はた</sup>が発表されました。それは、きれいなにじ色でできた、ネコの顔の形<sup>はた</sup>の旗でした。

こうして、ネコ王国では、困ったときにはこの旗<sup>はた</sup>を見上げ、みんながそれぞれの力を合わせて、ほがらかに乗りこえながら、すてきな国をつくっていきました。